

「ゴールは偶然の産物ではない FCバルセロナ流 世界最強マネジメント」

フェラン・ソリアーノ(著)、グリーン裕美(訳)

アチーブメント出版 2009年12月1日刊

本書は、2003年から2008年までスペインの世界的なサッカークラブ、FCバルセロナで財務部門を担当した元副会長のフェラン・ソリアーノによって書かれた、サッカークラブの経営論である。

著者の経営実績としては、営業収益を2002/3年度の1億2300万ユーロから2007/8年度の3億0900万ユーロへと約3倍も増加させ、世界一のサッカークラブと称されるイギリスのマンチェスター・ユナイテッドにほぼ肩を並べる高収益クラブに変貌させることに成功したことが挙げられる。同時に、FCバルセロナは2008/2009年にはスペインリーグ優勝、UEFAチャンピオンズリーグ優勝、2009/2010年世界クラブ選手権優勝と、サッカーでの実績としても世界の頂点を極めたといって良いほどの華々しい成果を上げている。

著者が本書で主張していることは、サッカークラブを経営することは、基本的には一般企業経営と同じだということである。すなわち、業界を知り、競争相手を知り、収益源を確定し、経費と収益の適切な比率を求めそれに実態を近づける、ということである。また、FCバルセロナはただ単にスター選手を集めるだけではなく、選手間の補完性やポジションごとのバランスなど細かい配慮がなされていることも明らかにされ、報酬もボーナス含んだ出来高払いと固定給のバランスをとっていることも論じられている。

本書にはFCバルセロナのサッカー戦術やトレーニングなどの話題がない代わりに、世界の一流クラブ間での選手の移籍問題や、グローバル市場でのサッカークラブのマーケティング手法などについて率直に書いてあり、世界のトップレベルのサッカークラブのあり方が良くわかる。

とりわけ印象的であったのは、FCバルセロナを「クラブ以上の存在」として位置づけている点にある。スポンサー探しに躍起となっている多くのクラブを尻目に、FCバルセロナは収益の0.7%を国際協力プログラムのために寄付し、ユニフォームのユニセフのロゴは150万ユーロの寄付とともにつけている。なんともクールな広報活動ではないだろうか。